

生徒の開かれたキャリアのために、先生ができること

挑戦して承認もされる機会をつくり 自ら道を拓こうとする姿勢を育む

和光国際高校(埼玉・県立) 新井晋太郎 先生

挫折や回り道もある人生で
やりたいことに向かうには

「チャレンジすること」と「自分を信じてがんばり抜くこと」。生徒たちがそんな経験をできる機会を増やしたい。和光国際高校の新井晋太郎先生はそう思っているという。「チャレンジして、仮に失敗しても、そこから学ぶことがありますし、失敗が悪いことだとは思っていないんです。また、人生には『どうがんばってもできないことがある』ものですが、それでも自分を信じていろいろ

なことに挑み、がんばっていくと、道が拓けて、やりたいことにたどり着けるようにも思うのです。そう思うのは、僕自身が挫折や回り道をたくさんしてきたからかもしれません」
教員になりたいと思って大学に進学したが、当時は教員採用がほとんどない氷河期。途中で諦め、教職課程を取るのもやめた。卒業後、食品メーカーに就職。だがモチベーションが続かず「この世界では通用しない自分」を味わった。3年目で退職塾の講師に。その時に「人に教えるのが好きだ」と確信し、大学に通い直

生徒の機会と選択のために / 大切にしている3箇条

1

生徒たち自身による 企画や運営の機会を

大小さまざまな教育活動のなかに、一部でもよいので、生徒たち自身で企画や運営にチャレンジする機会を設ける

2

生徒の挑戦を発信し 本人や周囲を刺激

生徒の挑戦を記録し、ネットや校内で発信。がんばりが承認されるようにしつつ、その情報で他の生徒の挑戦も促す

3

1対1の時こそ 生徒の変化に着目

距離があって変化を察知しづらい生徒でも、その成長に気づき、承認していけるよう、1対1の時間を大切に



入学と卒業で常に生徒が入れ替わる学校で、思いもよらない出会いも経験し、どう受けとめるか思案もしているであろう先生方。その体験があるからこそ、生徒の機会と選択についてサポートできることがあるのかもしれませんが。4人の先生方の取組をご紹介します。

＼ 新井先生の「現在地」 ／

多様な出会いと別れのなかで
生徒のチャンレジを促す

国 際高校ならではの校務分掌、国際教育部に所属する新井先生。イギリスやオーストラリアの海外研修や、シンガポールの修学旅行の内容を、海外派遣プログラム作成経験のある同僚と考え、現地の学習にも同行している。

それらの活動では各国の人との交流も重視。前任校でも定時制の生徒たちと職業人の交流の場を設けており、生徒に多様な出会いをもたらすように努めている。

現任教では、その出会いのなかで、生徒が出し物の企画などにも挑戦。イギリスの海外研修では、生徒発案で、ソーラン節やダンス、クイズや弾き語り、生け花や書道、英語歌唱などを現地の人と楽しんだ。その主体的な交流のなかで、生徒の視野が広がることを、新井先生は期待している。



イギリス研修の現地での交流。ホームステイし、自分たちで考えた出し物も披露して濃密に関わるので、帰国の際は別れを惜しんで泣き出す生徒もいるという。

あらい・しんたろう ● 大学卒業後、食品メーカーに入社。3年目に退職し、塾講師、私立高校教員、東京都公立中学校教員を経て、埼玉県公立高校教員に。高校1校目となる工業高校の定時制では、民間企業やNPOなどの外部と連携し、職業人との交流をはじめとするキャリア教育を推進した。2023年より現職。

「でも人生はそういうものかな、ずっと悩み続けるのかな、とも思います。だから今の目標は、自分にできることを日々一生懸命やることです」

して教員免許を取り、私立高校の非正規教員になった。ところが3年で契約を打ち切られる。それでもめげずに、東京都の教員採用選考を受け、合格して中学校に配属された。3年間働いたのち、心惹かれていた高校勤務をするために埼玉県の教員採用選考を受け、現在に至る。

「自分の経験を通して思ったんです。生徒が勉強して良い学歴や経歴を手にするにも一定の意味はあるけれど、それ以上に大事なことは、学校生活全般で『挑戦すること』『自分や社会を知る』『粘り強くがんばる』といった姿勢を培うことなのでは、と。そうした姿勢は、どこの世界でも普遍的に通用するでしょうから」

だから新井先生は、生徒が自分たちで企画や運営にチャレンジするよ
うな場を生み出そうとしてきた。前任校では、定時制の生徒たちにもまで参加していなかった文化祭への出店を呼びかけ、皆でやり抜くなかで自信をつけていく姿を見守った。現任教では、国際教育部の担当として、留学生の受け入れや、生徒の海外研修の際に、相手国との交流の一環となる「歓迎会」「お別れ会」の企画運営を生徒に委ねてきた。また、バレーボール部の顧問として、隣の中学校のチームを招待する大会を開催。大会運営を生徒たちに任せ、生徒たちがフランス語、スペイン語、中国語で挨拶する場も設けた。「進学校の生徒の日常は、教科学習が中心で、文化祭や体育祭など一部の行事をのぞけば、ほかの活動は『時間をかけられない』と教員のほうで

変化に気づくことで
成長を後押ししたい

企画や運営を進めがちです。ですが、生徒たちは中学校までいろいろな出し物や式典をやっているのだから、できることは任せると、結構、生き生きと動いてくれるんです。そうして自分たちで何かを成した経験が、この先も自分で道を拓けるという自信に繋がるように思います」

力を入れ、個別にも声をかけるそう
だ。そのうえで、研修中は生徒の様子を写真や動画に撮り、学校のホームページやSNSにアップしている。「自分の挑んだことが記録に残り、保護者やほかの人にも見てもらえると、喜んでやる気が増す生徒も多
いんです。保護者の方も楽しみにしてくださっていて。そうした発信を通して、まだ踏み出せないでいる生徒たちに、挑戦することの魅力アピールすることもねらっています」